

## 第8回 『平家物語』

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

＊重衡卿の北の方と申すは、＊先帝の御乳母、大納言佐殿とぞ申しける。三位中将、一の谷で生け捕りにせられ  
たまひし後も、先帝につきまゐらせておはせしが、壇の浦にて海に入らせたまひしかば、武士の荒けなきに捕は  
れて、旧里にかへり。＊日野といふところにおはしけり。中將の露の命、草葉の末にかかつて消えや  
らずと聞きたまへば、夢ならずして今一度見もし見えもすることもやと思はれけれども、それも叶はねば、泣く  
より外の慰めなくて、明かし暮らしたまひけり。

三位中将、守護の武士に宣ひけるは、「このほど、事にふれて情け深う芳心おはしつるこそ、ありがたううれ  
しけれ。同じくは、最後に芳恩かうぶりたきことあり。我は一人の子なれば、この世に思ひ置くことなきに、  
年ごろあひ具したりし女房の、日野といふところにありと聞く。今一度対面して、＊後生のことを申し置かばやと  
思ふなり」とて、片時のいとまをこはれけり。武士どもさすが岩木ならねば、おのおの涙を流しつつ、「なにかは  
苦しうさうらふべき」とて、許したてまつる。

中將なのめならず喜びて、「大納言佐殿の御局は、これにわたらせたまひさうらふやらん。本三位中將殿の、た  
だ今奈良へ御通りさうらふが、立ちながら見参に入らばやと仰せさうらふ」と、人を入れて言はせければ、北の  
方聞きもあへず、「いづらや、いづら」とて、走り出でて見たまへば、＊藍摺の直垂に折烏帽子着たる男の、痩せ  
黒みたるが、＊縁に寄りあたるぞ、そなりける。北の方、御簾の際近く寄つて、「いかに、夢かやうつつか。これ  
へ入りたまへ」と宣ひける御声を聞きたまふに、いつしか先立つものは涙なり。大納言佐殿、目もくれ心も消え  
はてて、しばしは、ものも宣はず。

三位中将、御簾うちかついて、泣く泣く宣ひけるは、「去年の春、一の谷でいかにもなるべかりし身の、せめて  
の罪のむくいにや、生きながら捕はれて大路を渡され、京・鎌倉、恥をさらすだに口惜しきに、はては奈良の＊大  
衆の手へ渡されて斬らるべしとて、まかりさうらふ。いかにもして今一度、御姿を見たてまつらばやと思ひつる  
に、今は露ばかりも思ひ置くことなし。出家して、形見に髪をもたてまつらばやと思へども、許されなければ、  
力及ばず」とて、額の髪を少し引き分けて、口の及ぶところを食ひ切つて、「これを形見に御覽ぜよ」とて、たて  
まつりたまふ。北の方は、日ごろおぼつかなくおぼしけるより、今ひとしほ悲しみの色をぞ増したまふ。

## 語句

○あらけなし「荒けなし」(形)へなしは程度の甚だしさを表す  
接尾語: 荒々しい、乱暴だ。

○かうぶる「被る・蒙る」(動)こうむる。いただく。  
へ室町時代以降は「かうむる」

○なのめなり「斜めなり」(形動)①いいかげんだ・平凡だ

②格別だ・すばらしい

→○なのめならず(連語)並ひととおりでない、格別だ。

○つばね「局」(名)①宮中や貴人の邸宅内で、それぞれ別に

仕切られている部屋。上級の女官・女房が起居する部屋。  
②①を持つ女官・女房の称。

○いつしか(連語)いつか。へ時についての疑問を表す  
(副)①いつのまにか。早くも。

②(下)に願望の表現を伴って早く。

(形動)あまりにも早い・早すぎる。

○うちかづく「打ち被く」(他カ)四へ「うち」は接頭語  
(衣類などを二層にかける・頭にかぶる。

○おぼつかなし「朧掴無し」(形)①はつきりしない

②不安だ・気がかりだ ③待ち遠しい